

を解き明かすきっかけを与えている。それと同時に、近年多数積み重ねられている植民地主義と文化の関係を論じる論考のなかでも彼の分析は傑出している。

ギアツの劇場国家論の登場以降、バリの歴史研究は活況を呈している。そのなかでも、ハンク・シュルト・ノルドホルトのこの本は間違いなくバリの歴史を語る決定的な一冊である。現時点にあって、誰もが読みうる言説として流通可能性を獲得したこの決定版に与えられる位置にわれわれは今後注目すべきであろう。バリの内部でも、儀礼という実践的な場で自らの伝統文化を再構築する動きが進んでいるためである。旧宗主国の歴史家の書物をバリ人がどう読むのか、また読まないのか。儀礼として再生産される伝統という名の歴史と学術的書物のなかで再構築された歴史とがどのような関係を演じるのか。その関係のなかでバリの社会とそれをめぐる言説はどのように絡み合い、誰が実践するどのような歴史的反省が誰に意味あるものとなるのか。オリエンタリストのように普遍性に自らが立脚する根拠を見い出すことをあらかじめ禁じられているポスト・コロナ状況において歴史書は、たとえそれが決定版といえる精緻な言説であるとしても絶対的な客観性を勝ち取る資格はもはや奪われており、現実の社会のなかで実践的な意味が問われざるをえない。

ハーグの文書館で出会った当時、筆者にこの著者はバインダーで留められた手書きの文書を開ける時のそのインクの匂いがとても好きだと笑っていた。植民地行政官を勤めた経験のある東インドネシア社会の研究者を父に持ち、兄もまたジャワを中心としたインドネシア現代史の専門家であり、植民地時代からオランダとインドネシアの関係を生きた研究者一家のなかに育ち、嗅覚の体験を通して個人的な快樂さえ古文書探索に感じる根っからの歴史家であるこの著者にしても、バリでの調査経験から現在の古文書探索官アルシビストは自らが探求する対象との近くてよりどころのない関係を生きざるをえないことに敏感だった。この書物が受容される現場を注意深く見守っていきたい。

(永淵康之・名古屋工業大学)

Garrit J. Knaap. *Shallow Waters, Rising Tide: Shipping and Trade in Java around 1775*. Leiden: KITLV Press, 1996. X+255p.

Luc Nagtegaal. *Riding the Dutch Tiger: The Dutch East Indies Company and the Northeast Coast of Java 1680-1743*. translated by B. Jackson. Leiden: KITLV Press, 1996. 250p.

蘭領東インドの社会経済史研究では、1970年代半ばから Onghokham, R.Elson などによって19世紀半ば以降のジャワ島中東部を中心に、本格的な地方史研究が開始された。80年代に入ると M.R.Fernando, G.Knight なども加わって、強制裁培制度期のジャワを中心に、19・20世紀のジャワ・スマトラ島を対象とした地方史研究が盛んに発表されるようになった。これらの研究は C.Geertz の agricultural involution 論への批判を出発点としており、その中心的課題は、強制裁培制度が与える農村社会へのインパクト、およびプランテーションで使用される労働力の性格の解明にあった。<sup>1)</sup>だがその後、世界システム論およびアジア間交易論の展開にともなって、研究テーマの重心移動が起きる。90年代半ばになると、17・18世紀のジャワ島および外島部を対象としたモノグラフが続々と出版されるようになるが、その課題は、ヨーロッパ勢力や外国貿易が在地社会に与えるインパクトと貿易構造の解明が主流となったのである。<sup>2)</sup>

1996年にオランダ王立言語地理民族学研究所から出版された上述2書もこの新しい傾向に沿うジャワ島北海岸部の研究である。両書とも全体を精読するよりは部分利用される読者が多いと思われるので、まず内容を略述した後に利用上の注意点を述べる。

- 1) 1990年代初頭までのジャワ島に関する研究動向は、宮本謙介『インドネシア経済史研究——植民地社会の成立と構造』京都：ミネルヴァ書房。1993. pp.4-38に詳しい。
- 2) 代表的なものとして M.C.Ricklefs. *War, Culture and Economy in Java 1677-1726: Asian and European Imperialism in the Early Kartasura Period*. Sydney. ASAA Southeast Asia Publication Series. 1993.; B.W.Andaya. *To Live as Brothers: Southeast Sumatra in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Honolulu. University of Hawaii Press. 1993. がある。

Knaapの著書は、オランダ東インド会社（以下VOCと記す）支配下のジャワ北岸における1770年代中葉の海運および交易の実体を描く研究書であり、今後多くの歴史家に引用されると思われる。導入部にあたる第1章では、ジャワ北岸における海運・交易の構造と動態とを復元するために、オランダ本国に収蔵されるVOC文書から収集した1774年9月から1777年9月までのジャワ北岸15港の船舶出入港記録をコンピュータ処理したことが述べられる。

本書は以下3部に分けられ、第一部（第2・3章）では本論に先立ち背景説明がなされる。VOCは、当時の東南アジア諸王朝同様、特定の産物の集荷独占と徴税とによって収入の極大化をめざしたが、東南アジア諸王朝との違いはこの政策を世界規模で展開した点にあった。またジャワ北岸諸港は大半が河口に位置するため、砂州の発達により巨船の接岸は望めなかった（第3章）。

第2部（第4～12章）では船舶出入港記録の具体的な分析が行われるが、第4～8章では、交易を支える海運事情が検討される。まず船舶および武器の種類と数を検討すると、ジャワ北岸ではVOCの巨船（積載量1,000トン級）と、小規模で多様な東南アジア船（8～20トン）が海運に従事しており、大小あわせて90%の船舶が武装し、VOC以外のプライベートな交易に従事する船舶では船長8,000人に対し5,000門の大砲、20,000丁の鉄砲を推計しえる（第4章）。ついで船舶の積荷量・目的地・航行季節が分析され、ジャワ北岸諸港を出発する積荷の25～60%がVOC船舶で運ばれたこと、バタビア出航のVOC船舶の40%程がジャワ北岸諸港を目的地としたこと、バタビアが海運ネットワークの拠点であったこと、プライベート船舶は平均して1年の5分の1しか稼動していないことなどが明らかにされる（第5章）。さらに船長と船員の人数、および乗組員の構成をみると、プライベート船舶ではジャワ人の船長が多く、乗組員もそのほとんどがジャワ人であった（第6章）。またプライベート船舶の所有者、および船舶維持・航海コストを考察すると、船長が船の所有者である事例が最も多いが、VOC職員（オランダ人）・中国人・ジャワ貴族などが所有者である事例もあった。積荷は平均15%が船長の所有であった（第7章）。

第2部の後半では積荷の内容が検討される。はじめにバタビア市内およびその周辺の交易が考察されるが、バタビアは遠距離交易の拠点でありかつ大消費地であるために、その輸出入は以下で述べるジャワ東北海岸の輸出入とはほぼ逆の対応関係にある（第8章）。バタビア以東のジャワ諸港の輸出入をみると、プライベート船舶の輸入品はキンマ・籐・鉄・阿片・少量の綿であり、輸出品は干魚・赤色染料（soga）・タマリンド・椰子油・米・スイカ・タバコ・豆などであった。またVOC船舶による輸入品は銅貨が突出しており、輸出品はコーヒーなど欧州向け産物が主であったが、上述の農産物も輸出した（第9章）。ついでジャワ北岸の主要な交易品である米と材木が組上りになる。米は全体の約半量がジャワ島内に輸出され、その他はマラッカ海峡方面に輸出されたが、後者ではVOCが特権的地位を占めていた。木材については、突出した輸出港であるレンバンの事例が分析されるが、輸出先は90%以上がバタビアであった（第10章）。最後に塩、砂糖、タバコ、布の輸出が検討されるが、塩はプライベート船舶によって主にマラッカ海峡・カリマンタン島に輸出された（第11章）。第12章では海運にかかわる税制が考察される。

第3部（第13・14章）では、第2部の結論がより長い時間軸の中へ位置づけられる。第13章では17世紀初めから19世紀までの技術革新にともなう主要な船種の変遷が描かれ、第14章では16世紀から19世紀までの海運の量的展開、およびジャワ北岸の地方交易とバタビアの役割との歴史の変遷が考察される。

第15章は本書全体の結論部分であり、以上の本論のまとめと、先行関連研究の諸議論に対する著者の立場を示すことに充てられる。

Nagtegaalの著書は、ジャワ東北海岸における華僑騒乱（Chinese War 1741-43）の社会経済的要因を、1680年から1743年に至るVOC文書の渉猟によって探るものである。

第一部（第1～4章）では、パシシル（ジャワ東北海岸）に対するVOCの影響が、マタラム王国の権力構造との関わりの中で考察される。第1章ではVOCのパシシル進出が1680年頃まで述べられ、当時VOCによって形成されたマタラム王国観——東洋的専制——が、20世紀のマタラム研究にも影を落

とすことが指摘される。第2章では、パシシルのレヘント（首長）達はマタラム王の宗教・文化的権威に服すことはなく、打算から服属を選択したこと、1680年以前はマタラムからの課税もさほど重くなかったことが指摘される。第3章では、近年のマタラム研究が利用され、王国は個人的関係の集積として成立していたため政権が不安定であったことが示される。そして第4章では、1680年以降マタラム王とVOCの利害が一致した結果、王国が植民地収奪の道具化したとの主張が展開される。すなわちVOCが王国の政権安定に必要な武力支援を行う一方で、マタラム王はVOCの必要とする米穀と金銭とを供給したが、このことがパシシルのレヘントの税負担を増す結果となったのである。なおこの結論は、一握りのヨーロッパ人（VOC）がなぜパシシル全域に影響力を行使し得たかという歴史学上の問題に対する本書の答となっている。

第2部（第5～8章）では経済に関わる様々なテーマが扱われる。第5章では、パシシルの町々（towns）が1680年頃を境として変化したことが指摘される。これらの町では1680年頃から始まるVOCの交易支配と中国人の大量流入とによって、中国人コミュニティが顕在化すること、町と農村部との経済的紐帯が強まる一方で両者の格差が拡大すること、中国人内部でも富者は町に、貧者は農村部に住む傾向があったことなどが指摘される。第6章では1680年から1743年に至る貿易体制が概観される。1680年以降VOCはパシシルにおいてドミナントな商業勢力となり、既存の交易にVOCの補助交易としての役割を担わせたが、この役割に最も適合的だったのは中国人であった。第7章では、パシシルの交易の大半を占める対バタビア交易のうち、輸出が1680年から1743年までの間に量、価格とも減退したことが明らかにされる。さらにVOCが、小売り商業からのレヘントの締め出し、非VOC商人の周辺化、織布・砂糖産業の抑制などの政策をとったことから、VOCの活動はパシシルの輸出と産業に悪影響をもたらしたと結論される。第8章では、バタビアからの輸入動向を検討したのち、パシシルの「ナショナル・インカム」が論じられる。対バタビア交易は1680年から1725年頃までの入超の後、1735年頃に出超に転じたが、輸入額は1670年代後半から

1730年代後半までに4分の1以下に減退した。これは1680年頃の主要な輸入品であり貨幣機能を持っていたインド綿布の輸入が、VOCの銀貨輸入と交代するかのよう急減したためであった。

第3部ではVOCの活動が現地人支配層と住民の紐帯に与えた影響が考察される。第9章では、パシシルのレヘント達が1680年頃より経済開発に乗り出し商業作物（藍・コーヒー）栽培に取組んだが、彼らの活動はVOCにもマタラムにも両刃の剣となったことが主張される。第10章では、レヘントが支配下の住民を必ずしも十分支配し得ず、逃亡・反乱が起きたこと、レヘント直属の住民が最も重い負担を負ったことが述べられる。第11章ではVOCによるパシシル住民との直接接触の検討が目指され、木材伐採が住民に過重な負担を強いたこと、米穀の直接買い付けがレヘントおよびマタラムの反感を買ったこと、多種多様な強制労働の徴発が住民間にも反感を醸成したことなどが指摘される。第12章では1730年頃からの反乱の事例と華僑騒乱の経過とが述べられる。

最後の「エピローグ」は本書の結論部であり、各章の主張が再び繰り返される。

以上の2書は、VOC文書を渉獵して数々の新知見をもたらす良心的著作である。Knaapの著書は、従来よく知られていなかった史料をコンピュータ処理することによって多数の新知見を披露し、18世紀後半のジャワ海交易に具体像を与えた貴重な労作である。一方Nagtegaalの著書は、ジャワ東海岸のレヘントや庶民を歴史的主体の一部として描く努力をするとともに、18世紀前半のジャワ島沿岸交易の一端を示す。ただし史料をオランダ本国所蔵のVOC文書にのみ依拠する両書は、18世紀の文書が質量ともに不十分で限界を多く持つために、議論の説得性・実証性に乏しい箇所がある。加えて両書とも、文書に対する著者のスタンスが明示されていないため、幾つかの主張に関しては慎重な吟味が必要となる。この後者の問題点を示すために、やや回り道となるが、まず近年の研究成果に従って18世紀のジャワとその周辺の状況をVOCの覇権に焦点を当てて略述しよう。

大航海時代が幕を閉じようとする1660年代より、VOCは東南アジア島嶼部各地で土着の政権の内紛

に乗じて交易の独占権を得たが、1674年から1723年に至るジャワ島の一連の戦乱は VOC にとって独占権獲得の好機であった。この間バンテンを除く西部ジャワは VOC 直轄領となって1705年までに戦乱が終結した。しかし中東部ジャワでは、マタラム王国が VOC の監督下に置かれたものの、1723年まで断続的に戦乱が続き社会は疲弊した。その後ジャワ島では20年ほど平和が維持されたが、1740年にバタビアで勃発した華僑騒乱を発端として、中東部ジャワとバンテンでは再び戦乱が続いた。中部ジャワとバンテンでは1750年代半ばに VOC が宗主国としての地位を確立し、戦乱が収まったものの、東部ジャワ、特に東端部は反 VOC 勢力の拠点となり、71年に至ってようやく平定された。以後ジャワ島は VOC 支配下で平和が続き農業生産も増大した。しかし VOC の財政は年々悪化し、1777年からは改革者クレルクが総督に就任するが、81年から始まったイギリスとの戦争は、ジャワ島に戦時体制を強いたうえ、本国との海運・通信を絶ち切って VOC を苦境に陥れた。

一方ジャワ島周辺では18世紀を通じて VOC の勢力後退が進んだ。1680年代より多数の中国人が東南アジアに渡り、交易・商業作物生産・スズ採掘などに従事するようになったが、その一方で1710年代にはイギリスが広東に中国貿易の拠点を得るとともにカントリー・トレーダーが対中国交易品である胡椒とスズをマレー半島・スマトラ島・バンカ島より買い付け始めた。このため VOC は1720年代には政治権力を持たない島嶼地域での貿易独占が難しくなっていた。そして中国で南海の産物の需要が増大した18世紀中葉に、対インド交易の覇権がイギリスの手に落ちたため、VOC の貿易独占権は、ジャワ島沿岸以外では空洞化した。島嶼部ではイギリスのカントリー・トレーダー、中国人、ブギ人などが多数交易に携わり、リオウは中国・インド・東南アジア物産の集散地として、1750年代後半から1777年までの間にバタビアを凌ぐようになっていた。また1750年代にはイギリス船がバリ海峡を通過して東部ジャワに忍び込み、中国人移民の手を通して相当量のアヘンを売りさばいており、1774年にはイギリス船がモルッカ諸島より香料の苗を持ち出したと言う。そして1781年に始まったイギリスとの戦争は、VOC に、

通商網の崩壊と島嶼部全域における自由貿易の条約化(84年)という打撃を与えた。

以上を踏まえて Knaap の著書を振り返ると、総じて著者は VOC 文書が生産され残された個別的な条件に注意を向けていない。第一に、考察対象期間に1774-77年を選んだ理由として、18世紀中で史料が最も充実した期間である点のみを挙げているが、オランダにおける史料の残存状況は偶然ではなく、1774-77年は説明抜きで18世紀後半を代表し得る時期では無かろう。上述のように1770年代半ばは、VOC 支配下のジャワ島にとってつかの間の平穏な時期であるうえ、1774-77年は総督ファン＝リームスデイクの任期(1775-77)とほぼ重なり、またバタビアに来る中国ジャンクが18世紀を通じて最も少ない時期(仔細な理由不明)とも重なったのである。第二に、著者は各地の政治・経済的状況の差異を捨象して全島および周辺の島に単一の分析概念を適用し、地域区分が必要な場合には西部・中部・東部ジャワという19世紀以降の区分を使用する。しかしジャワ島各地は1770年代の交易を分析するに際し無条件で一括できるほど均質な歴史を共有してきたわけではなく、特に平定直後のジャワ島東端部の交易を、VOC が実際にどの程度管理し得ていたのか疑問が残る。ジャワ島東部の交易が先述のイギリス人・中国人・ブギ人等の交易と連続している可能性は、本書の Appendix に掲載される統計表からも窺われる。

以上は、VOC 文書の意味参照枠組みに対して著者が無批判であることを示すが、このことは、著者の結論がしばしば植民地時代に書かれた概説の叙述と一致することと無関係ではなからう。たとえば第14章のまとめ部分では、アジア間交易およびグローバル交易のセンターが16世紀のマラッカ、17・18世紀のバタビア、19世紀の the Straits へと移動すると述べられる一方で、先述したジャワ島を取り巻く交易状況は四捨五入の四捨の側に廻される。同様にジャワ島沿岸交易における VOC の圧倒的な海運力・影響力が所々で強調されるが、これがジャワ島沿岸以外の海域での VOC の劣勢と密接な関係を持つ点には言及がないのである。だが現在求められているジャワ島沿岸交易史は、VOC 文書の枠組みを踏襲したバタビア・セントリックな視点ではなく、

南～東アジア交易の動向を見渡す視点からなされた研究ではなかろうか。

これに対して Nagtegaal は、植民地史観とは異なる視角からパシシル社会を描こうとするが、VOC 文書が地域や事件を分類する枠組みを、やはり解体しきれないでいる。著者は導入部でまず考察対象地域を限定する。それは、ジャワ人側の視点に立った「マタラム支配下のパシシル」、すなわちブレベス（チルボンの東）からバンガル（現プロボリンゴ）までとマドゥラ島の西半分であると言う。しかし当時の VOC 文書の様式や、1678年より VOC 領となったスマランが主要な考察対象地域であるなどの本書の内容から判断して、著者の言うパシシルとは、実際には VOC 文書の地域概念である「ジャワ東海岸（Jawa's Oostkust）」からバンガルより東とマドゥラ島東半分を除外した地域であるとみて間違いないだろう。

そしてさらに、本書がパシシルに飛び火した華僑騒乱の社会経済的要因の分析を主題としているならば、著者の言うパシシルが、分析のうえで最も重要な地域的枠組みであるかどうか疑問である。確かに VOC 文書では、ブレベスからバンガルに至る地域の出来事は「ジャワ東海岸」で起こったこととして報告、ファイルされ、VOC の政策はしばしば「ジャワ東海岸」を単位として決定される。しかしバタビアの華僑騒乱に端を発する武力闘争や政治的緊張は中国人ネットワークに従ってバタビア後背地やカルタスラ周辺でも見られた。その一方でパシシルでの武力闘争を激化させた社会経済的要因は、未だ産業や交易が地理・生態に拘束される度合いの強い18世紀にあっては、パシシル内でも局地的なものであった。著者の言う社会経済的要因、すなわち多数の貧しい中国人の存在、村落賃貸制度・木材供出制度・輸送負担の重圧、糖業や米穀輸出に由来する軋轢などは、著者の挙げる地名を拾う限り、スマランにほど近いムルヨ山南側の平野部に集中的に出現する。オランダ人が中国人に襲われた6つの町もやはりムルヨ山南側の平野部に限定される。さらに著者がパシシルにおける華僑騒乱の特徴とする、貧しい中国人・「原住民」庶民が VOC・レヘント・中国人エリートと対決するというエスニシティを越えた階級的対立の図式が、実際に武力闘争の形で認めら

れたのはデマク近郊に限られた。華僑騒乱とその社会経済的背景を分析するにあたり、ジャワを越えたレベルからデマク近郊の地区レベルに至るまで、地域を重層化して把握することは、この騒乱を第1～3次ジャワ継承戦争や19世紀のジャワ戦争と比較し位置づけるといふ、より大きな課題のためにも重要であろう。

ついで本書におけるバタビアとパシシルとの交易の分析をみると、その具体像の提示は非常に興味深いものの、分析に際して文書の枠組みの安易な利用が気になる。著者が主に利用した史料はバタビア城日誌であり、その中のパシシル諸港からバタビアへ入港した船舶と、バタビアからパシシル諸港に出航する船舶の記録である。そしてそこからパシシルの輸出額と輸入額を算出し、差額をパシシルの「ナショナル・インカム」と名付ける。しかしマタラム支配下のパシシルの「ナショナル・インカム」が、マタラム王国全体の交易収支と如何なる関係にあるのかは、算出し得ないためか言及が無い。さらに輸入額と輸出額の年代毎の推移は全パシシルの合計値でのみ示されるが、Knaap の著書同様、戦乱の激しかった年や VOC の勢力の及びにくい地域の数値は何処まで実態を反映しているだろうか。また交易に携わる中国人については、VOC とジャワ社会との仲介者として VOC の方針に従順であった側面が描かれるが、ジャワ島以外にもネットワークを持つ中国人が交易において VOC の意向に従っていただけとは思えない。オランダ植民地文書では、支配下にある一地域について定期的に報告書が作成される場合、経済の項ではオランダのコントロール下にある経済活動の展開が主な内容となり、政治の項では、政治的に不穏な動きと武力行使が主な内容となるのが常態である。

以上、両書とも主題および分析方法の研究史上への位置づけ、および史料としての VOC 文書の限界をより明確に示すことが望まれる。Nagtegaal が言うように、社会経済史においては現地語史料は極めて限定的にしか利用できないが、VOC 文書の相対化には他のヨーロッパ語史料の使用に始まり、生態、地理、農学、海洋関係諸学の成果の活用など開発可能な方法が様々にあると思われる。

(大橋厚子)